

平成26年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	静岡県立島田高等学校	氏名	戸塚 康博
-----	------------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

高校世界史の教師として、生徒に願うことは「国際社会において、日本人としての自覚を持ち、主体的に生きていく上で必要な資質や能力を身につける」ことである。また、自分もそうありたいと願っている。今回、幸運にも好機を得、この願いを実現すべく次のことを主に計画し、成果を得た。

- ① 協力隊員・JICA 職員へのインタビュー (世界で働く動機・やり甲斐・日本の子ども達へのメッセージ)
- ② 空手演武・JAPAN Tシャツ等による日本のPR (日本を知ってもらうことで交流が活性化)
- ③ 世界史教材の収集 (映像のみならず、書籍・実物教材など多数入手)

いずれも今後の授業に大いに役立つものばかりだ。このように予想を遙かに超える充実した海外研修になったのは、JICAのみならずNIED・国際理解教育センターの協力があったからこそである。特に同行ファシリテーターの久世さんには大変お世話になった。彼をはじめ、魅力的な人たちとの素敵な出会いがなければ、ここまでの充実感は得られなかった。この場を借り感謝の気持ちを伝え、記録に残したい。ありがとうございました。メダワシ。

2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

行ったことのない遠い国、見たことのない景色。ならばガーナに行きたいと思った。確かに、いつもの旅のような感動はあった。一睡もせず、車窓の風景に釘付けになった。信号待ちの売り子、頭に荷物を乗せた女性たち、混沌とした街、日がな一日樹下で世間話に興じる村人たち、サッカーに興じる子どもら、フーフーを作る夕飯時のかまどの煙 etc. 行く先々で見つける小さな発見や、好奇心がくすぐられることには楽しさを覚えた。しかし、そんなことよりも、大切なことに気づいた。その『国』に行ったことよりも、その『人』に出会えたことの方が、考え方や生き方に大きな影響を与えるのだ。青年海外協力隊員らの、健気で、献身的で、情熱に溢れる姿には感銘を受けた。厳しい異境の地であって、たったひとりの日本人として、歯をくいしばって、頑張っている。ニックネームで呼ばれるほど皆に愛され、信頼されていることがわかった。私には、もはや『敬』の言葉しか思いつかない。翻って自分を顧みる。人は人によって変わるのだ。教育の基本は『敬』である。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

チョコレート、カカオ、TOYOTA が土ぼこりをあげて走るアフリカの国程度のイメージしかなかったガーナ。滞在十日間というのに、今は十年来の知己を得たような気持ちだ。この報告書をまとめているちょうど一ヶ月前の7月31日に初めて会ったというのに、この間数えるほどしか顔を合わせていないのに、約一万六千kmも離れているというのに、地元静岡の話をしたり、ガーナの話で盛り上がる。一時帰国した時には名古屋、

静岡で語らった。JICA のテレビ会議システムで、名古屋とガーナをつないでワークショップもやった。温度計が必要だと聞き、複数の学校の理科室から 33 本が集まった。この温度計が、ガーナの農村まで飛んでいく。こんな愉快な話はない。世界史の教師として、いくら机上で世界に思いを馳せたとしても、行ってみなけりゃつながらない。行ってみなけりゃつながらないんだよ JICA さん。さて、シニア海外ボランティアには、いつ行けることや考えながら、机上で世界に思いを馳せる哀れな世界史教師に戻ろう。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

「働く」とは何か。「お金のため」「生きていくため」「社会のため」「自己実現のため」「夢のため」等々、これは自問自答を繰り返していく永遠の課題である。教師が進路指導する上でも、重要なポイントである。我々はよく生徒に「夢は何か」を聞く。ガーナでは「soldier」という答えが多かった。戦争がなく平和を自慢するガーナ人が、なぜ兵士になりたいのだろうか。それは兵士として戦うことが目的ではなく、むしろガーナは平和であるがゆえ、兵士は命の危険に曝されることもなく、安定した給料が得られるからなのだと得心がいった。つまり「夢は何」という質問を、「将来は何をして金を稼ぐのか」という意味だと理解してガーナの子どもは答えたのだ。「夢は何」に日本の高校生は「わからない」と答える。彼らはガーナの小学生よりも考えていないのか。否、わかっているのだ。お金もある。生きていける。家族や友人もいる。ただ、自分のことがわからないのだ。自分には何ができるのか。自分が社会や世界とどう繋がるのか、わかっているだけなのだ。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

JICA は日本の青年たちに、開発途上国へ行き国際協力、経済援助に関わる機会を用意してくれている。潤沢な資金、世界とのネットワーク、強い組織力等々青年たちは、この機会を大いに利用すべきだ。僅かの期間ではあったが、青年海外協力隊・シニア海外ボランティア・専門家、JICA 関係者と直接話をする事ができた。どなたも情熱に溢れ、誠実で、研究熱心という日本人の美德を持ち合わせた魅力的な方たちばかりであった。彼らは日本の宝、日本人の鑑である。実績に於いても JICA の国際的評価は高い。このことをもっと多くの人が知るべきだし、日本人こそが評価すべきだ。この教師海外研修の機会を与えていただいた我々は、もちろんこのことを広く紹介していこう。そして、多くの生徒に海外で活躍するきっかけを作っていこう。

ただ一つだけ、JICA に今後検討して頂きたいことがある。退職してからシニア海外ボランティアをしている方が仰っていた。「日本に帰ってもこの経験を伝える生徒がいない」のだ。同じ境遇の私のようなシニア教師にも、現職派遣の機会を与えていただけないものか。貴重な体験を、世界史の授業の中で多くの生徒に伝えてやろう。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

④-1 現地の方の自宅でのフーフー作り & 子どもとの交流

人生初のガーナ食「フーフー」は、クマシ近郊アダンシノース郡フォメナのオセイさんの農園で食べた。フーフーは餅に似ているが、餅のようにのはびない。材料はキャッサバ(芋)とプランテン(料理用バナナ)

だ。キャッサバとプランテンを粉末状にしたものを、鉄板の上で焼く。これが餅米を蒸す過程。熱くなった粉を臼に入れて杵でつく。ぺったん、ぺったんやるのは餅つきと同じ。お母さんが合いの手を入れてひっくり返すのも同じ。結構な運動量だ。日本人も一緒に、ぺったん、ぺったんやってへとへと。「フーフー」の名前はこの作り方から由来するものかもしれない。

フーフー自体に味はついていないので、スープの中に入れて食べる。これがまた熱いので「フーフー」と冷ます。これも名前の由来かもしれない。味は、ティラピアという魚のだしが利いていて、なかなかおいしい。少し辛めだが許容範囲、村人たちと一緒にフーフーをつまんだ。(戸塚康博)

⑥ 天水稲作持続的開発プロジェクト

まるで日本の水田のような風景だった。農家の人はとても幸せそうだった。収入が増えて子どもをインターナショナルスクールに通わせることができたと話していた。自信に満ちあふれていた。しかし、産業構造が高度化していけば、就農者は減っていく。私も農家に生まれたが、違う職に就いた。やがてガーナでも日本と同じような後継者不足が起こるだろう。日本の農業は機械化が進み、作業も楽になったが、ガーナはまだ手作業での重労働だ。やがて機械化は進んでいくだろうが、その機械化までどれだけの時間を要するだろうか。日本の一農家の歴史を辿ってみても、数十年かかっている。一農家の倅の歴史は、日本の高度経済成長期に始まっている。その日本でさえ数十年かかったのに、ガーナでは、と心配になる。それでも、いきなり機械を導入するようなことはしない。現地調達、現地にあった経済成長を共に考え、持続可能な開発を支援していく。開発支援には「忍耐」が必要だ。教育も同様だ。(戸塚康博)

⑫-2 野口英世研究室

日曜日ということもあって、他に訪問者はいなかった。というよりも、無理をお願いして休日にも関わらず、鍵を開けに来てくれた警備員さんに感謝。我々ガーナチームの貸し切り状態で見学をした。以前、福島の猪苗代湖近くに野口英世の生家を訪ねたことがあった。かつて読んだ伝記とともに、思い出が蘇ってきた。記憶の中にある野口英世の生誕の場所と、今いる野口英世の終焉の地が結びついた。再び、母シカの手紙も読んだ。子を思う母の気持ちは海よりも深い。海といえば、彼は、船でアフリカにやってきた。荒波にもまれた波乱の生涯だったようだ。51歳で幕を閉じたが、同い年の私はまだまだこれから。(戸塚康博)

⑯ テテクワシカカオ農園

アクロポンという地名のとおり、平地が多いガーナには珍しく、小高い台地の上に町があった。アニメ運転手が操るバスは、坂道を登っていった。やはり上から見下ろす景色はいい。山間の集落が箱庭のように見える。よく見れば、小さな宿屋(ペンション)も多いようだ。さしあたり、このアクロポンは静岡でいうところの御殿場高原・朝霧高原・それとも伊豆高原か。首都アクラの避暑地的な役割もある町のようだ。

そんな一角に、ガーナで初めてカカオが栽培されたという「テテクワシ・ココ農園」があった。ガーナではカカオのことをココと呼んでいる。今やガーナ=ココ、ココ=ガーナとまで言われるようになったガーナのココ。さしずめ「ここは、ココの聖地」といったところだ。フォメナのおセイさんの農場にもカカオはあったが、

さすが聖地のカカオの方が、成りが良いような気がした。(戸塚康博)

● ガーナの移動途中

お疲れの方もいらっちゃったようだが、見る物すべてが刺激的で楽しくてたまらない私は、バスの移動中一睡もできなかった。バスの席もその日によって、あちら、こちらと変えてみた。新しい発見と感動の毎日だった。そのバスを運転してくれたのが、頼れる男アニム。真面目で、安全運転第一で、我々を目的地まで連れて行ってくれた。屈強な体格は、毎日のエクササイズによって維持しているのだそうだ。バスの中は、笑い、諸連絡、歴史講義、人生相談、専門家の説明、およそ日本語のわからない彼には雑音だらけだったろうに、「幸せなら手をたたこう」のチュイ語を練習していると、「わかる！」と反応してくれた。我々もそれに気をよくして練習に励んだ。本番でも自信をもって歌うことができた。空港に着く前の別れ際に、もう一度チュイ語で「幸せなら手をたたこう」を歌った。アニムも一緒になって、ガーナチーム13人が一体化した時だった。(戸塚康博)

5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1... [TTK_1440]

◇キャプション：ケープコーストの足跡

◇解説文：

この海岸から多くの人が、アメリカ大陸に連れて行かれた。どんな思いでこの海岸を歩いたのだろうか。奴隷貿易の拠点ケープコースト城近くの海岸に、誰かの足跡があった。）



●写真2... [KWM_1102]

◇キャプション：俺とやる気か？空手のポーズをとるガーナの子ども

◇解説文：

学校訪問で、空手を披露した。その2日後、別件で転んで怪我をした子に、チームみんなで折り鶴を作り少年の家に届けに行った。近所の子が寄ってきて、空手のポーズを見せた。俺を覚えていたんだな。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・飛行機・機内はとても寒いことがわかっていたので、真冬並みの防寒対策をした。上はウインドウブレーカー、下はオーバーパンツ。決して大袈裟ではなく、それでちょうど良かった。
- ・持ち物…ジプロックは荷物の小分けに多用する。もう一つ、荷物の小分けに良いのがタッパーのようなプラスチックケース。スーツケースは大体四角なので、衣類でも、電化製品でも、書籍でも、お菓子や食料でもタッパーに入れると収まりは良い。

- ・てぬぐい…てぬぐいの用途は多い。ハンカチ、ちょっとした荷物をくるんだり、濡れた物を拭いてもすぐ乾く。一番のおすすめは、簡易ふんどし。てぬぐいの他に、ウエスト周り以上の長さのはちまきが必要だ。
- ・セーム…水泳選手なら知っているセーム。水分をよく吸い取ってくれ、絞るとほとんど乾く材質でできている。大きなタオルはかさばるので代わりにこれがおすすめ。旅先で洗濯をしても乾かないだろうと諦めず、洗濯後セームで吸い取っては、セームを絞り、を繰り返せば、結構翌日乾く。

7. その他全般を通じての感想・意見など

いろいろな人の想いや熱意や好意が絡みあって、偶然や奇跡をよび、人と人が思いもよらない所でどんどん繋がっていく。人と人がつながり、国と国が繋がっていく。不思議で、ロマンがあり、未来があり、わくわくしてくる。人の力の偉大さを感じた。

この文章は、この研修を通じて繋がった仲間たちとのメーリングリストの抜粋である。帰国後も情報交換を活発に行い、ガーナに温度計を送ることになった。

この写真は、一時帰国された JICA ガーナ事務所の加藤調整員に、その荷物を渡しているところ。

これほどまでに充実した研修を用意して頂いたことに、JICA 中部、NIED・国際理解教育センターに心底より感謝申し上げます。



以上